

テーマ：ウォーカーブルなまちづくりの実現に向けて

講師：渡邊 浩司氏 一般財団法人民間都市開発推進機構 常務理事

日程：2023年4月25日



令和2年の都市再生特別措置法の改正により、「ウォーカーブルなまちづくり」が注目されるようになった。ウォーカーブルなまちづくりとは、居心地が良く歩きたくなるまちをつくらうという取組みであり、これまでハード中心だったまちづくりを人間中心に転換するという、まちづくりの価値観自体の変革である。道路や空間をどう整備するかではなく、人々のアクティビティをどうするかを中心にまちづくりを進める取組みが国内外で進められている。

副区長を務めた豊島区では、池袋駅前のグリーン大通りを歩行者空間にする取組みが行われているが、主体的に行動する多くの市民が「としま会議」を通じて集まり、まちづくりの担い手として参加している。

コロナ禍を経て、海外ではウォーカーブルの動きが爆発的に進み、パリでは多くの車道が歩行者空間に換わっている。日本でも「ほこみち制度」が整備され、道路空間活用が急速に拡大してきた。

人口減少・超高齢社会が進む中、持続可能な集約型都市構造が求められる時代になっている。公共が計画・整備するハード中心の時代は終わり、これからは、アクティビティがもたらす価値でまちを評価しなければならない。そして、自ら動く市民が主体的にまちづくりにかかわる時代になるだろう。パブリックマインドを持つ民間と公共がパートナーとして連携し、ビジョンを共有し、地域経済が循環する持続可能で人間中心のまちを実現し、地域の価値を高めていくことが求められている。

東京大学工学部都市工学科卒業、建設省（現国土交通省）入省。都市局中心に歴任後、2014年豊島区副区長。2016年以降、国土交通省都市局街路交通施設課長、同市街地整備課長、同大臣官房技術審議官（都市局担当）、2022年国土交通省退職、現在に至る。（公社）日本都市計画学会副会長、日本大学客員教授。博士（工学）。

グリーン大通り 地域の人たちの力で地域の価値を高める



出典:豊島区資料

図1 グリーン大通りまちにかかわる人たちの新たな動きが広がる

海外の主要都市では道路空間再編の動きが加速

○車なしであらゆる機能にアクセスできる「15分の街」を提案、歩行者・自転車・公共交通空間への再編を推進（パリ）



○車道を再編や一時閉鎖し歩道や自転車レーンへ（ニューヨーク、ロンドン、ベルリン、ウィーン、ミラノ等）

日本でも道路占用緊急措置が6月に示され、空間活用が急速に拡大 ⇒ ほこみち制度へ

図2 加速化するまちづくりの変化